

モノづくり文化交流拠点構想

名古屋市

1 はじめに

(1) モノづくり文化交流拠点構想の策定	2
(2) 構想の再検討	2

2 構想の考え方

(1) 基本理念	4
(2) 目的	4
(3) 事業イメージ	5
(4) 金城ふ頭について	6

3 事業展開のイメージ

(1) 導入する機能	8
(2) 機能の展開イメージ	9
(3) 展開の方向性	10
(4) モノづくり文化交流拠点全体エリアイメージ	12

4 モノづくり文化交流エリアの展開

(1) 方向性とイメージ	14
(2) 展開事例について	15
(3) 想定される事業形態及び運営の考え方について	22

5 連携・協働についての考え方

(1) 知識や技を結びつける広域ネットワーク化	24
(2) 市民参加型の「演示」の展開	24

6 構想の実現に向けて

(1) スケジュール	26
(2) 段階的整備について	27
(3) 空間の有効利用について	28

参考資料

1. これまでの取り組み	30
2. モノづくり文化交流講座 開催状況	32
3. 市民からのアイデア・意見募集	37

1 はじめに

(1) モノづくり文化交流拠点構想の策定

①背景

名古屋を中心とするこの地域は、温暖な気候と木曾三川や伊勢湾、濃尾平野といった水や地形にも恵まれ、それを背景に先人たちが脈々とモノづくりの文化や技術を育んできました。こうした土壌風土のもと、糸、土、鉄、木、食など多種多様で裾野の広いモノづくり産業が根付いており、日本の産業の屋台骨を支えている地域であります。

一方、国際化が進展する中で、日本が世界に誇るべきモノづくりの拠点が次々に海外に移転するとともに、かつて高度経済成長を支えた熟年労働者の職場からの大量離脱や少子化などの影響により、特に若年層のモノづくり現場離れも深刻化しており、大きな社会問題となっています。本市においても、市内の事業所数やその従業員数は、ここ数年減少しています。

こうした状況を見据えた上で、モノづくりの継続的・持続的発展や、平成17年（2005年）に開催された「愛・地球博」の理念と成果の継承のため、開催母都市である本市がリーダーシップを発揮していくことは意義深いことと考え、モノづくり文化交流拠点構想を策定することとしました。

②策定経過

構想の策定にあたっては、平成18年度に「モノづくり文化交流懇談会」、平成19年度に「モノづくり文化交流拠点構想検討会議」を設置し、各界の幅広い分野から有識者の方々に、そのあり方や方向性、展開方法などについて議論していただくとともに、市民の方々からも多数のアイデアや意見をいただきました。

こうした取り組みを踏まえ、市は平成19年度に「モノづくり文化交流拠点構想」を策定しました。

(2) 構想の再検討

①再検討の背景

ア JR東海の参画表明

平成20年5月、東海旅客鉄道株式会社が構想への参画と、JR東海博物館（仮称）の建設を発表しました。

本市では、ＪＲ東海博物館（仮称）が構想の理念に合致し、拠点の中核となるものと考え、平成 23 年春の開館に向けて、積極的に支援していくことにしました。



ＪＲ東海博物館(仮称)整備イメージ



イ 生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）名古屋の開催決定

平成 20 年 5 月 30 日、生物多様性条約第 10 回締約国会議（COP10）の開催地が名古屋市に決定しました。COP10 の開催決定を契機に、環境に対する市民、企業の意識が更に高まっています。

ウ 経済状況の変化

平成 20 年秋、アメリカに端を発する 100 年に一度とも言われる同時不況が世界を襲いました。日本では特に、輸出に依存する製造業が大きな打撃を受け、「元気な名古屋」と言われたこの地域は一転、不況に陥りました。

市の経済をいち早く不況から脱出させるという市政の方向性のもと、社会状況の変化を踏まえ、構想については一旦立ち止まることとしました。

②新たな視点について

ＪＲ東海の参画や社会状況の変化に適切に対応し、より魅力的で賑わいのある拠点を創出するため、新たな視点を追加し、構想の再検討を行いました。

<新たな視点>

集客性の向上



持続的な賑わいの創出

子どもが楽しめる



次世代育成に向けた取り組み

乗り物をテーマとする



地域に根ざした乗り物技術の活用

民間活力を導入する



企業が有するノウハウ、技術力の活用

2 構想の考え方

(1) 基本理念

モノづくり文化・技術の継承と発展

産業技術資産を保全・展示・活用し、モノづくり文化・技術の継承と発展を目指します。

世界の技術・情報や人々が交流する賑やかな拠点の創出

モノづくり文化や歴史を新たな街の魅力として活かし、世界の技術・情報や人々が交流する賑やかな拠点とします。

持続可能な社会のあり方を提示

技術の発展や新しい生活スタイルの提案・体験などを通して、持続可能な社会のあり方を提示します。

(2) 目的

産業技術の継承と人材育成

この地域が脈々と育んできた
“モノづくりの文化・技術”
を後世に引き継いで行くとともに、
次代を担う人材の育成にも取り組みます。

産業振興・産業観光の推進

産業に関する技術・資産・人材など豊富な地域資源を活かし、産業の振興や産業観光を推進します。

新たな都市の魅力向上

多彩な人々との交流や活動などを通して、常に新しい技術や情報を取り入れながら魅力の向上を図ります。

(3) 事業イメージ

多様な 主 体

市をはじめ、国や関係機関、民間企業やNPOなどがそれぞれ主体となり、独自のスタイルと工夫で参加できます。

段階的 な整備

各参加主体がそれぞれの計画に合わせて長期的に整備していくことで、進化するミュージアムゾーンを創出します。

多彩な 魅力の 集 積

集客性や賑わいのある空間を展開。環境を意識した港の森づくりを通して、教育と娯楽の機能を合わせ持った施設の集積を図ります。

（４）金城ふ頭について

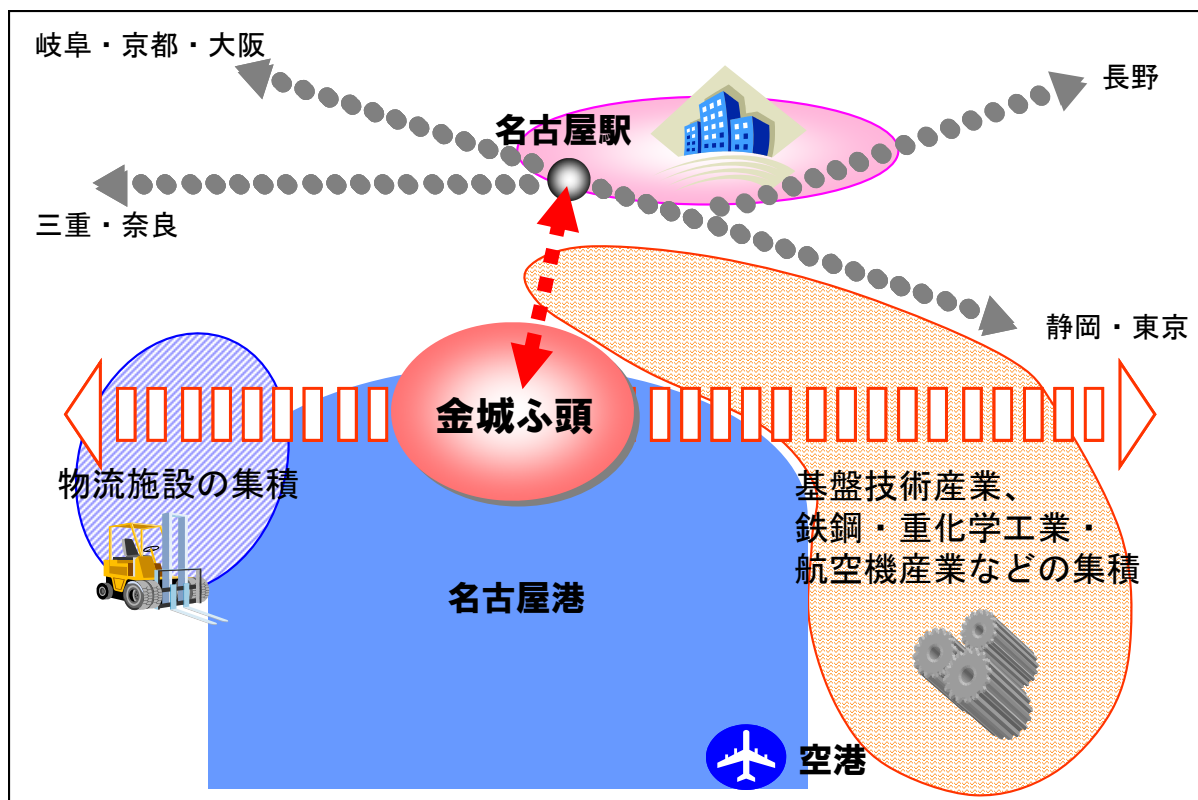
伊勢湾に注ぎ込む木曽三川の沖積平野に位置する本市は、古くから「水」と向き合いながら発展してきた歴史を持っています。今から 400 年前、名古屋城築城にあわせて堀川がつくられ、海の入り口であった熱田の湊が、尾張藩が所有していた木曽の山林から切り出された木材の集積の場となりました。そうした背景の中で培われた「木」の産業技術が、名古屋のモノづくりを育てたともいえます。

名古屋港の管理者である名古屋港管理組合は、物流のみならず、交流や環境をテーマに潤いがあり、人々に親しまれる港づくりにも積極的に取り組んでいます。

その中央に位置する金城ふ頭に展開するこの構想の推進が、そうした港づくりに拍車をかけ、新しい交流・観光の拠点となることが期待できます。

金城ふ頭の特色、可能性

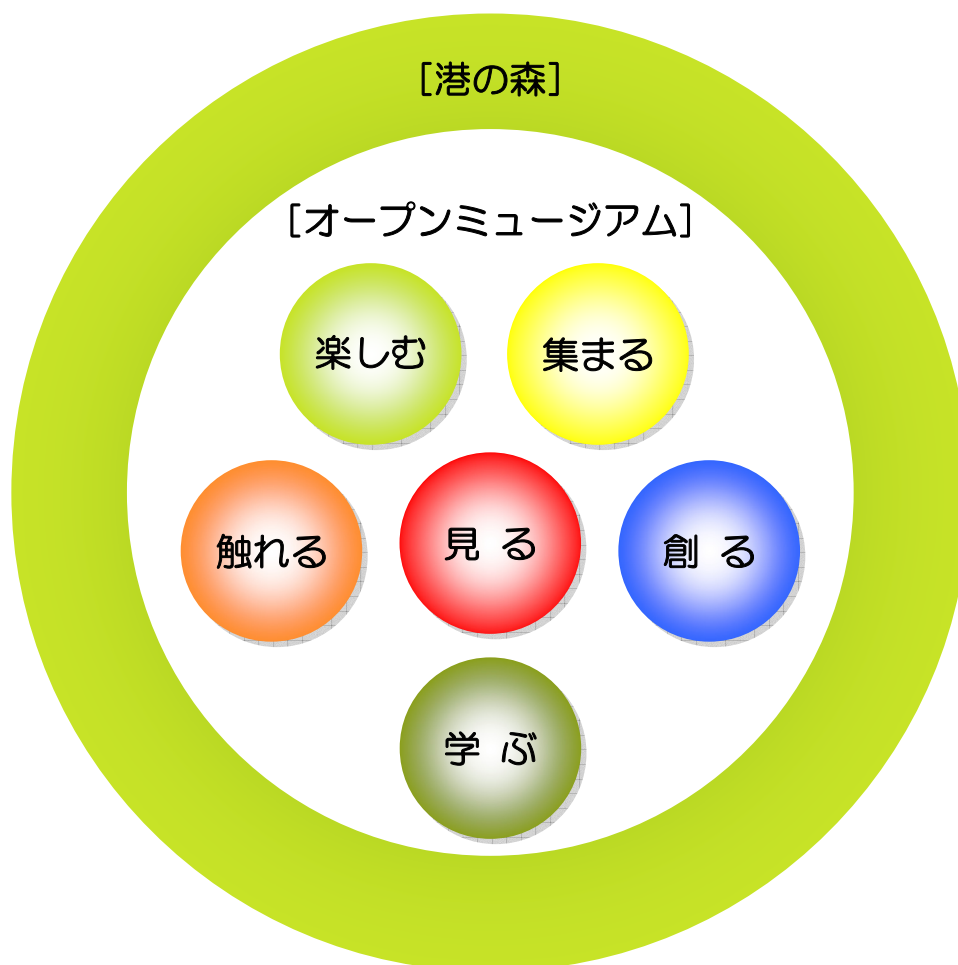
1 モノづくりに 関わってきた地域性	周辺地域には、鉄鋼・重化学・航空機、基盤技術などの産業が集積しています。
2 将来の展開が 担保できる空間を確保	まとまった事業用地の確保が可能です。
3 良好な交通アクセスを完備	名古屋駅からあおなみ線で約 24 分、また、名港中央インターにも隣接しています。
4 広い意味での「まちづくり」 への波及を視野	近隣地域との連携も可能です。
5 既存施設における集客性	現在、金城ふ頭には、年間 200 万を超える人が訪れています。



3 事業展開のイメージ

(1) 導入する機能

モノづくり文化交流拠点では、緑あふれる港の森の中で、世界の技術・情報や人々の交流で賑わう参加・体験型のオープンミュージアムとし、「楽しむ」「集まる」「見る」「創る」「触れる」「学ぶ」の要素の効果的な展開を目指します。

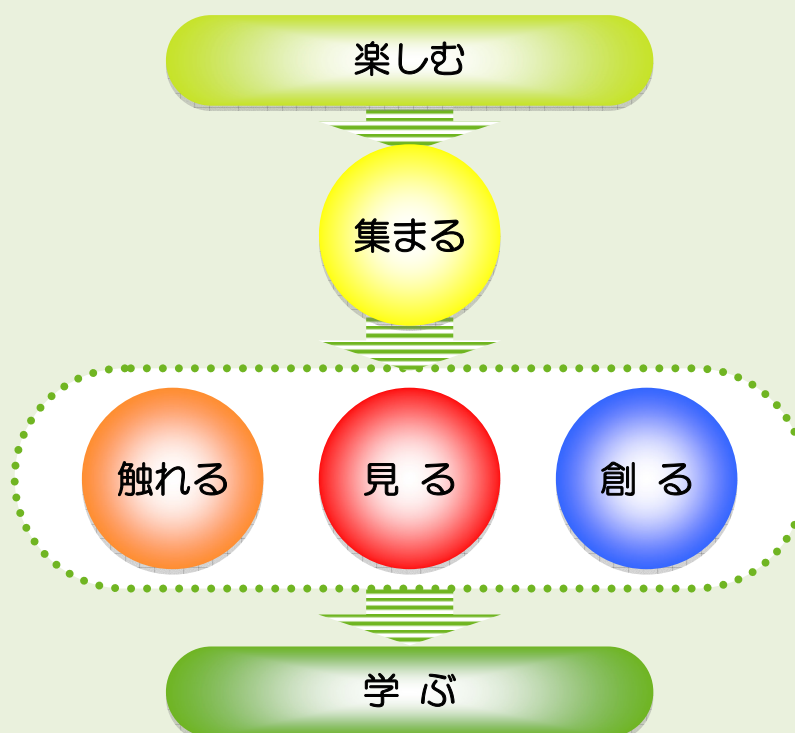


(2) 機能の展開イメージ

「入口は楽しみ・遊び、出口は学び」

楽しさ、遊びをきっかけとして、人が集まり、
モノづくりを見て、触れて、創るなどの体験を通して、
モノづくりのすばらしさや大切さを感じられる拠点とします。

<イメージ図>



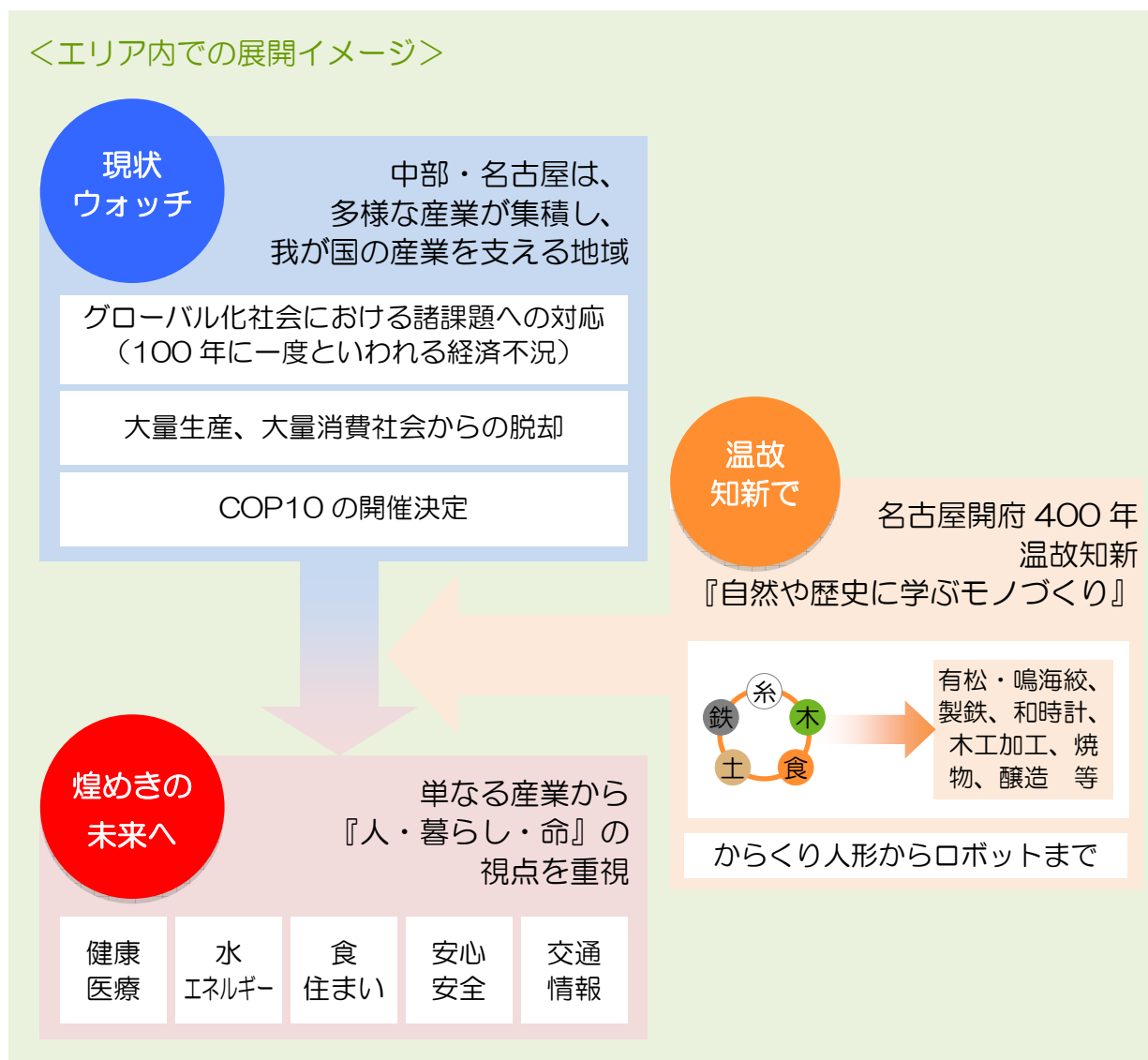
(3) 展開の方向性

事業展開を図るにあたっては、この拠点内における取り組みは当然のこととして、ここを核にして如何にネットワークを構築して広域的な展開を図ることができるかといった「広域展開」も、大きなポイントになると考えています。

①エリア内の展開

「大量生産、大量消費社会からの脱却」「グローバル化社会における諸課題への対応」といった、現状の諸課題について、自然や歴史に学んできたモノづくりの中に、その解決の糸口を探り、単なる産業としてとらえるのではなく、「人、暮らし、命」の視点を重視して、未来の生活につなげていくことを目指します。

<エリア内での展開イメージ>



②広域展開

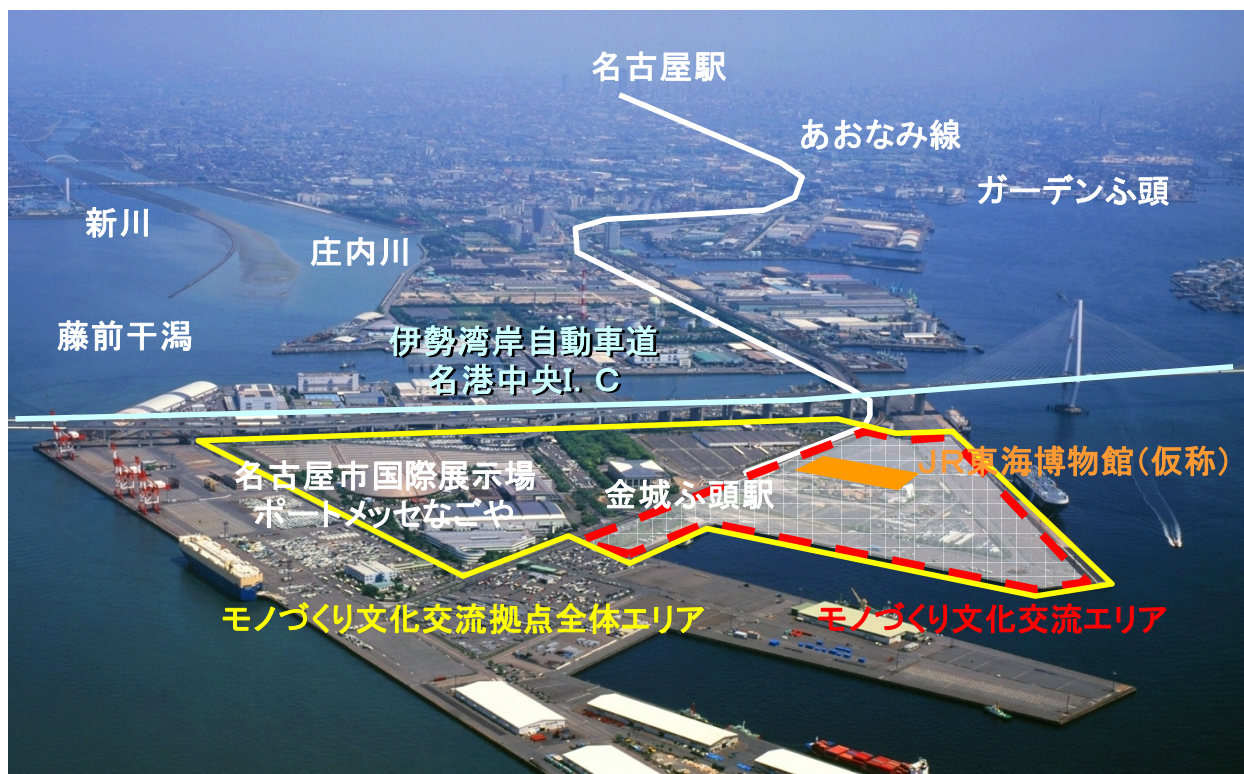
金城ふ頭を核に、モノづくり現場やガーデンふ頭、中部国際空港、各種既存施設、藤前干潟などとも連携した展開を考えていきます。また、金城ふ頭に港の森を創出することにより、東山の森づくりや西の森づくりなどと連携して、名古屋市の環境への取り組みを発信します。

< 広域展開のイメージ >



(4) モノづくり文化交流拠点全体エリアイメージ

黄色の線で囲んだ「モノづくり文化交流拠点全体エリア」は、約60ヘクタールあります。その中で、赤い線で囲んだ「モノづくり文化交流エリア」を中心として、構想のテーマ展開を図っていきます。

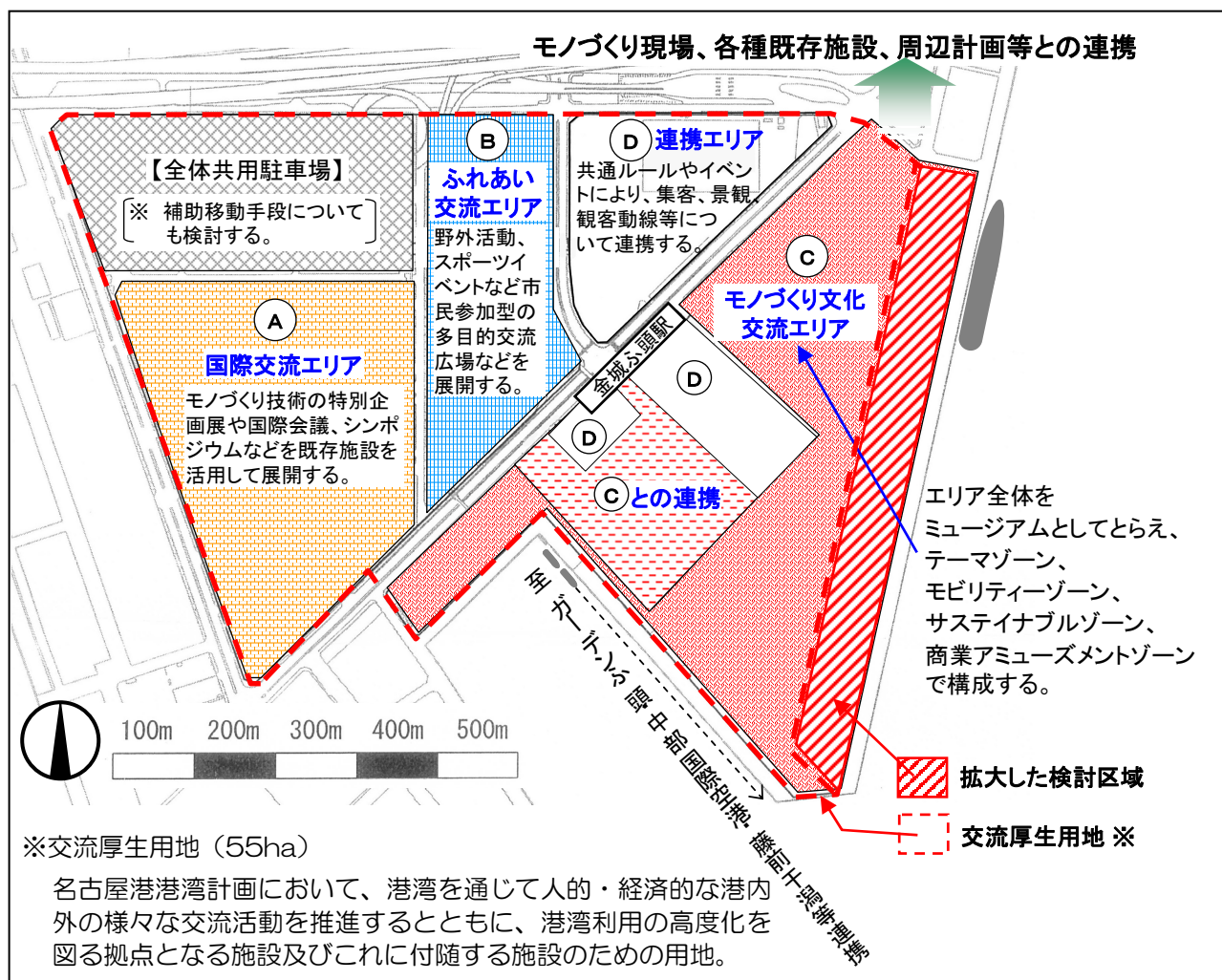


名古屋市国際展示場 ポートメッセなごや



金城ふ頭中央緑地

既存施設の用途や活動状況、また、港湾における計画などを勘案して、エリアをA～Dの4つに大別し、それぞれについての考え方を示しました。



あおなみ線



金城心頭駅

4 モノづくり文化交流エリアの展開

モノづくり文化交流エリアは、以下に挙げた方向性のもと、港の森の中で、モビリティゾーン、テーマゾーン、サスティナブルゾーン、商業アミューズメントゾーン、オープンミュージアムゾーンの5つのゾーンで構成します。

(1) 方向性とイメージ

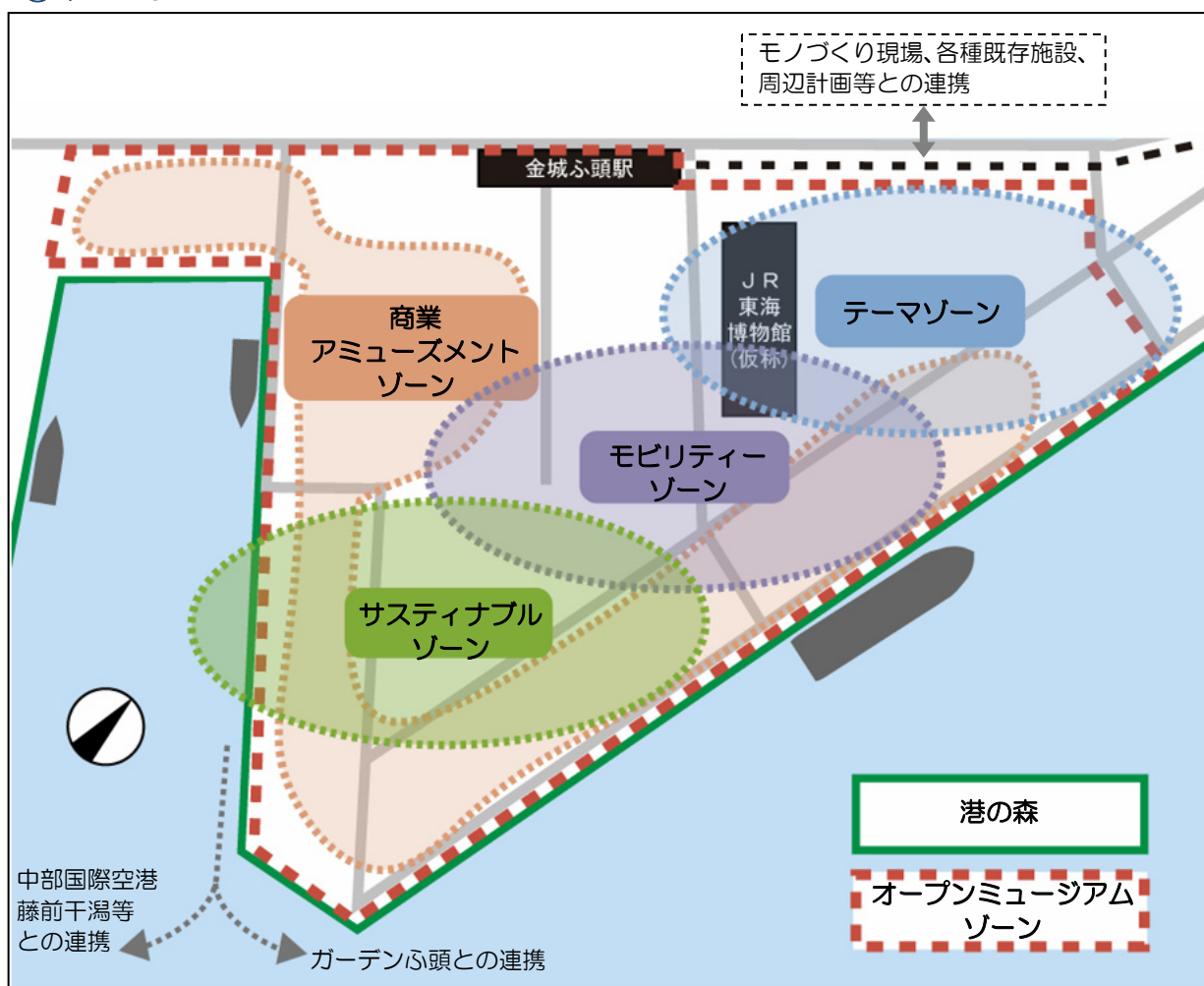
①方向性

空間としてのミュージアムの発想

水際と一体となった港の森づくり

他施設・周辺の開発計画との連携

②イメージ



(2) 展開事例について

① 展開テーマ

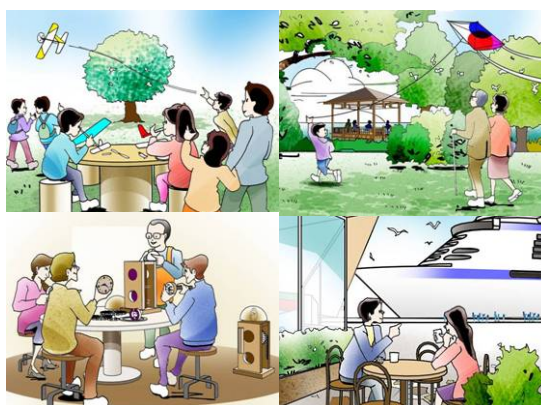
I 港の森づくり

金城ふ頭を緑あふれる森とすることで、イメージ向上を図るとともに、モノづくりの原点である自然を体感できる市民の憩える場を創出します。



II 幅広い世代への発信

モノづくりを体験するだけでなく、拠点の散策やレストランでの食事など、様々なライフステージに合わせた楽しみ方を見つけ出せるよう、エリア全体として多彩な魅力を備えます。



III モノづくりの足跡とドラマ

名古屋開府から400年にわたる産業の系譜、デザインや色彩、自然からの知恵などの観点からモノづくりの文化・技術を展開します。

IV 未来の生活体験と想像工房

最先端の環境技術やロボット技術、次世代モビリティを展示し体感することができます。また、モノづくりの製造過程も体験できます。

V 技術の継承と人材育成

子どもたちがモノづくり体験をすることで、その面白さを実感し「技」や「心」を学ぶ場を展開します。

VI 交流と賑わいの創出

中小企業、地場産業、NPO等の方々も出展参加できる場や、海の恵みや名古屋の食文化を感じられるシーサイドレストランなども展開します。

VII 空間としてのミュージアム

観光ツアーや産業観光のコンシェルジュデスクを設け、製造現場や周辺地域と連携したミュージアムの展開を図ります。

②各ゾーンでの展開事例

ア モビリティゾーン

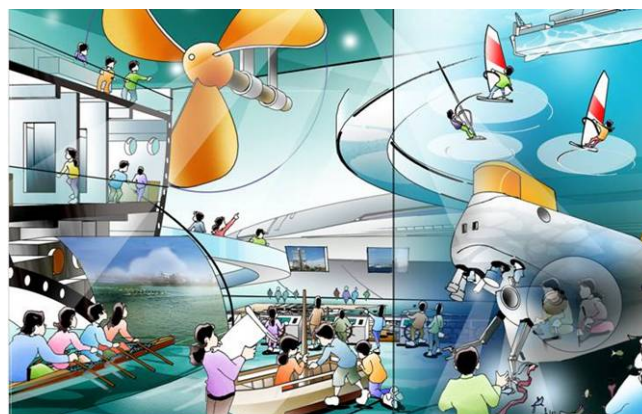
この地域に根ざした陸・海・空の乗り物技術を楽しみながら体験でき、乗り物の歴史、進歩に親しむことのできる場を展開します。

- ＜展開イメージ＞
- 陸・海・空の乗り物の仕組みや不思議
 - モビリティ体験スタジオ
 - エコモビリティ体験
 - 乗り物の歴史、進歩
 - 次世代モビリティ
 - 各種ロボット

- ◆陸（クルマ）ミュージアム
クルマの作り方や仕組み、歩行アシストロボットなど、未来のクルマ技術を楽しみながら体験できます。



- ◆海（船舶）ミュージアム
船舶の操舵や深海探査などを通して、船の仕組みを楽しみながら、体験できます。



- ◆空（航空・宇宙）ミュージアム
揚力体験や組立てワークショップなどを通して、飛行機の仕組みや原理などを楽しみながら体験できます。



◆モビリティ体験スタジオ

・シミュレーターライド

シミュレーターの操作により、乗り物の楽しさを疑似体験できます。



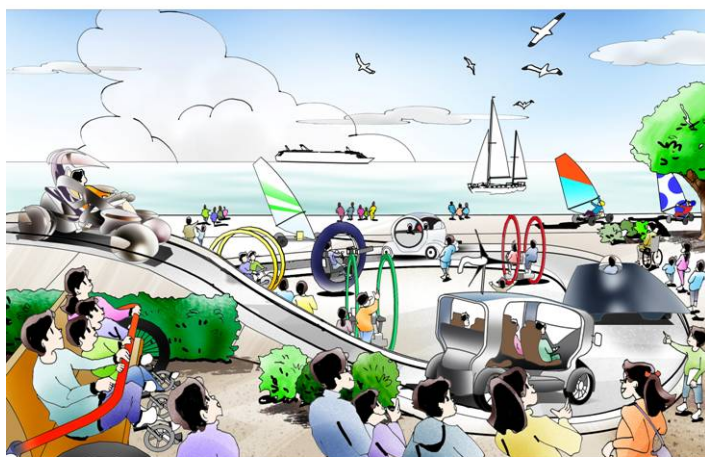
・様々な乗り物体験

未来の乗り物など、多彩な乗り物体験ができます。



◆エコモビリティ体験

ソーラーカーや電気自動車、ヘンテコ自転車など、環境に優しい乗り物を体験できます。



◆乗り物の歴史、進歩

江戸時代の籠から高速鉄道技術まで、乗り物の歴史や進歩を紹介します。



イ テーマゾーン

次世代を担う子どもたちが、モノづくりの歴史や文化を楽しみながら体験できる場を展開します。

<展開イメージ>

- 自然の叡智から学ぶモノづくり
- 子どもモノづくり体験、市民協働匠工房、セミナールーム、モノづくり市民村、交流サロン、ギャラリー、催事場
- モノづくりの系譜
- モノづくりのデザイン・色彩など感性価値の創造
- 人やモノの「流れ」から見たモノづくりの歴史

- ◆自然の叡智から学ぶモノづくり
モノづくりの原点が自然から学んだ技術であることを実感できる広場を創出します。



- ◆子どもモノづくり体験
 - ・匠ふれあい工房
子どもたちが匠の技に触れることによって、モノづくりの面白さに出会えます。



- ・ロボットワークショップ
ロボットキットの組立などを通じて、ロボット技術を楽しみながら体験できます。



ウ サステナブルゾーン

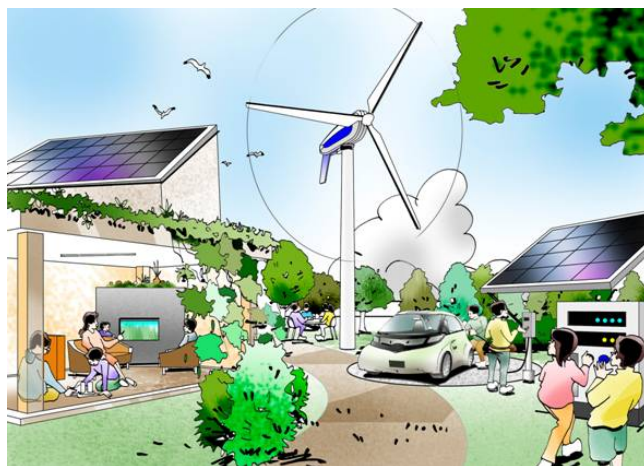
持続可能な社会に向けての取り組みや、最新の環境技術を発信する場を展開します。

<展開イメージ>

- 環境技術の展示、体験
- 子どもエコワークショップ
- 下水汚泥のエネルギー化
- バイオエネルギーで植物工場都市菜園
- アーバンデザインセンター

◆環境技術の展示・体験

太陽光発電や風力発電など、最新の環境技術とその応用を、実際に体験できます。



◆子どもエコワークショップ

子どもたちが自然の恵みに触れ、環境について楽しみながら体験学習できます。



エ 商業アミューズメントゾーン

海・港を活用した賑わいと楽しさのある商業施設として、飲食や物販施設などを複合的に展開します。

＜展開イメージ＞

- 伝統工芸品や特産品の直売
- シーサイドレストラン、オープンカフェ
- テーマレストラン
- 駅前広場のイメージアップ

◆伝統工芸品や特産品の直売

匠がつくった工芸品や特産品をその場で買うことのできる場を展開します。



◆シーサイドレストラン

名古屋の食文化をテーマとするなど、シーサイドレストランやフードコートを展開します。



オ オープンミュージアムゾーン

水と緑があふれる港の森の中、エリア全体を空間ミュージアムとしてとらえ、展開します。

＜展開イメージ＞

- 自然広場
- 市民参画による植樹
- 観光ツアー拠点とエコシップ
- 海からのウェルカムゲート
- 産業観光コンシェルジュデスク
- 水と緑の「里海」復活プロジェクト

◆自然広場

水と緑があふれる港の森の中で、食事や休憩、イベントのできる場を展開します。



◆市民参画による植樹

市民参画の植樹などを通じて、自分の成長とともに森の成長を感じられる場を展開します。



③展開イメージ

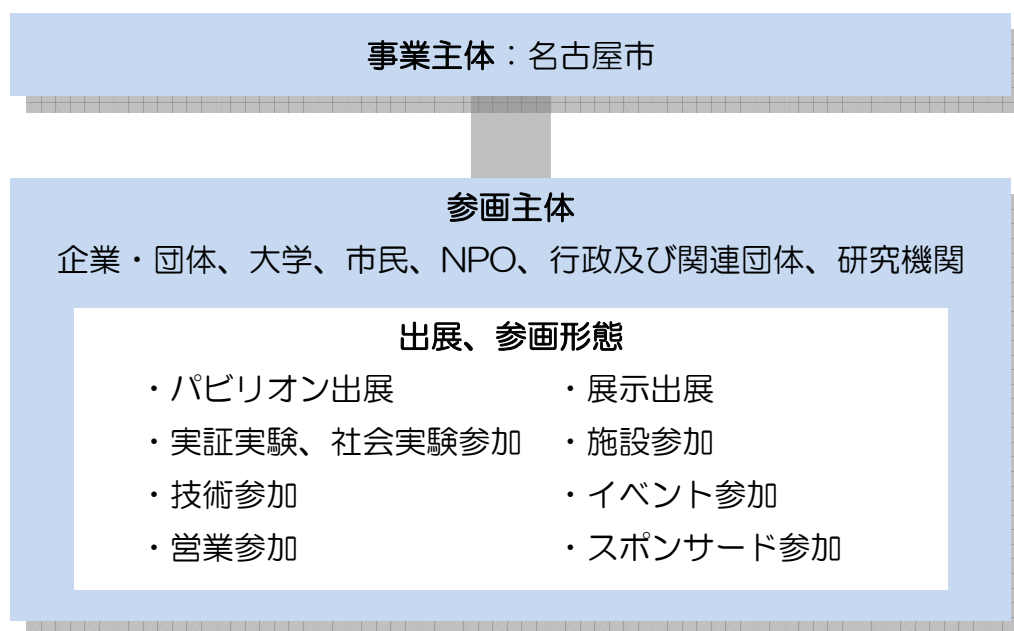


（３）想定される事業形態及び運営の考え方について

①想定される事業形態

モノづくり文化交流拠点構想は、金城ふ頭に港の森を創出することにより、水と緑があふれた広大なフィールドを活かし、官・産・学・市民・NPOといった多様な主体の方々により、長期間をかけ独自のスタイルと工夫で「モノづくり」「産業技術」をテーマに、「参加・体験型」による新しいモデルの「オープンミュージアム」を創造していこうとするものです。

このエリアを構成する各ゾーンは、それぞれが複合的に連動した多様で多彩な事業形態により集客性の向上を図ることとします。



②運営の考え方について

運営については、エリア全体と施設単体とを並列で考えていく必要がありますが、その方向性については、以下のように考えています。

- ・各参画主体が整備する施設は、自主運営を基本とする。
- ・行政は、事業主体として、長期的な整備を視野に入れ、持続的にモノづくりのテーマ性を発信していく。
- ・エリア全体の運営は、委員会等の組織の設置を検討する。
- ・委員会は、市民に気軽に何回も訪れてもらえるよう、共通入場券、公共交通機関とのセット券など各種割引制度の導入の働きかけや、ワークショップ、イベントの継続開催による集客性の向上を図ることを想定している。
- ・エリアの共通インフラは、行政が主体となって「港の森づくり」のコンセプトが感じられるような統一的整備を進める。
- ・維持管理は、参画主体と調整を図りながら行っていく。
- ・共通インフラの清掃など必要最低限のことは行政が行うが、委員会等の組織に任せるなど、段階的な整備に合わせて、効率的な対応の検討も進めていく。

5 連携・協働についての考え方

(1) 知識や技を結びつける広域ネットワーク化

この構想の実現に向けては、市民、NPO、各種団体、企業、国やその関係団体等とのパートナーシップのもと、どのように展開していくかがその鍵を握っています。

この構想においては、市内はもとより主としてグレーター名古屋圏にある各種のモノづくり関連施設や拠点などとの連携によって形成するネットワークの構築を図り、総合案内的な機能を持たせることで、ここが共同利用機能的な性格を有することになると考えています。

そのためには、その各ステークホルダー間との綿密な調整を図るとともに、円滑な運営や協働を進めるための仕組みを今後検討していく必要があります。

(2) 市民参加型「演示」の展開

これまで多くの博物館や美術館等では、来場者はそこで提供される展示を見たり、説明を聞いたりといった、どちらかといえば一方的な受け手としてのサービスの提供という関係が主であったと思います。しかし、今後これからのこうした施設は、来館者とミュージアム双方向の関係を形成していく必要があると考えます。

この構想では、ここで提供される各種のプログラムやハード・ソフトの活用をベースに、市民や来館者が主体となり積極的に参加できる形を目指していこうと思います。そうした事例のひとつに平成17年（2005年）に開催された「愛・地球博」における「地球市民村」の取り組みがあります。

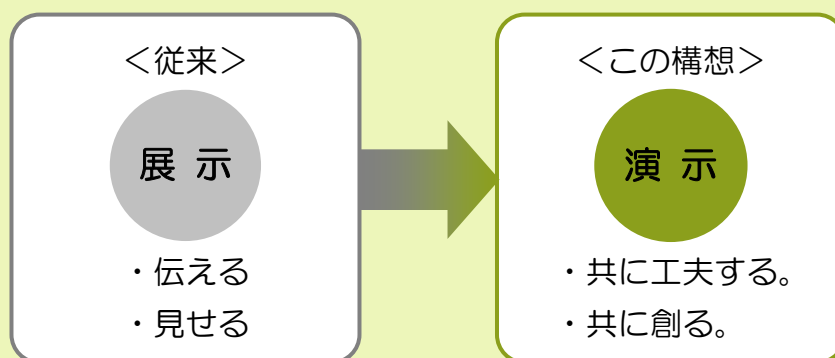
ここでは、この取り組みを参考にして内容を十分に分析し、その考え方や成果に学びながら、インタラクティブな「場の展開」を図っていこうと考えています。



また、展開の手法として考えられるもののひとつが、「演示」ではないかと思います。ミュージアムが従来担ってきた知識や情報を「伝える」「見せる」という「展示」サービスだけではなく、「共に工夫する」「共に創る」といったサービスを併せ持つということで、多くの市民や来館者が参画でき、その成果を別の市民や来館者に提供することができると思います。

こうした「演示」（参加者が演じながら他者にも楽しさを示す）手法を展開の柱のひとつに置くことにより、市民や来館者が主役となった展開を図っていかうと考えています。

<展開手法>



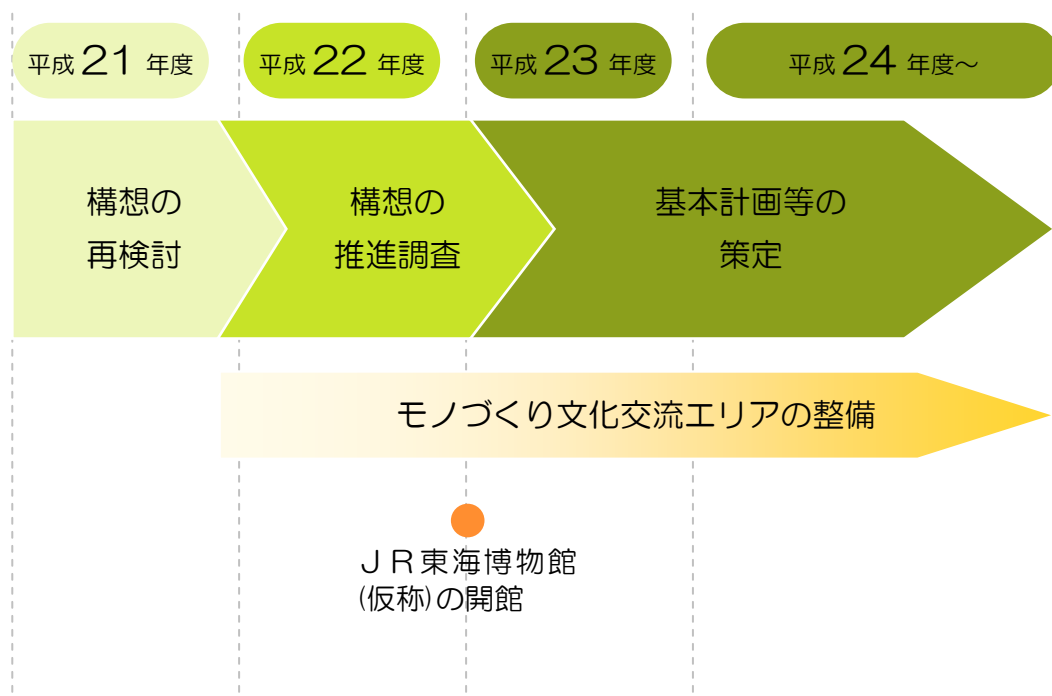
6 構想の実現に向けて

この構想の実現に向けては、展示や運営手法などについての課題も多くあります。特に、この構想は、名古屋市が単独で推進できるものではなく、市民、NPO、企業、国や関係機関等の方々と連携を図りながら進めていくことが不可欠です。

そのためには、幅広い関係の方々にこの構想の趣旨に賛同をいただき、協働で諸課題の解決に向けた整理を行い、構想をより具体化していく取り組みが求められます。

(1) スケジュール

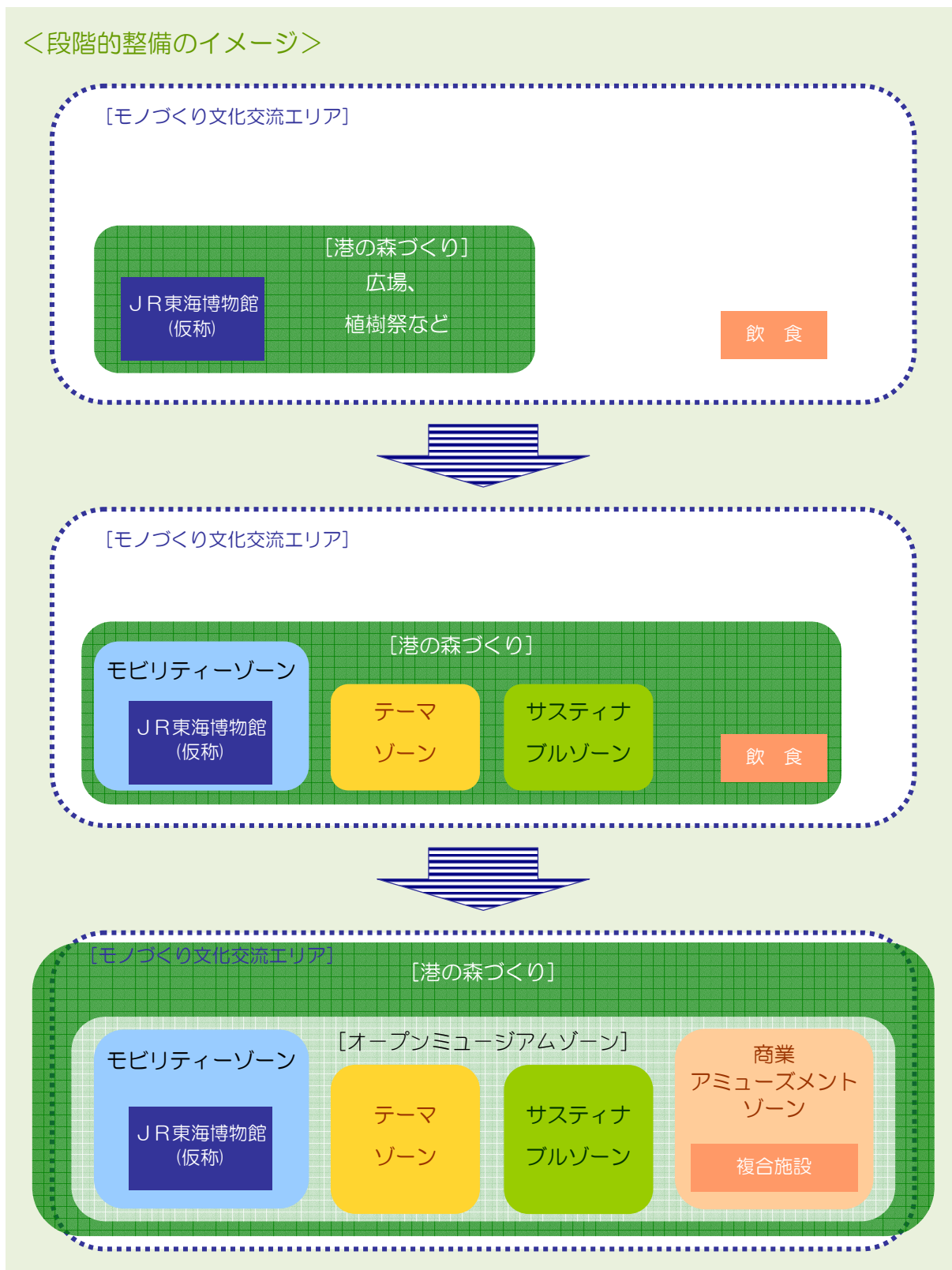
本市としましては、企業等に参画を呼びかけながら、次のようなステップで、詳細な検討を進め、構想を実現してまいりたいと考えています。



(2) 段階的整備について

拠点整備は、各参画主体の計画にあわせて長期的に実施していきます。

<段階的整備のイメージ>



（３）空間の有効利用について

集客を維持・向上していくためには、変化する市民ニーズに常に対応していく必要があります。

段階的な整備を行う中で、空間を有効に利用し、短期的なパビリオン出展、イベント参加など多様な展開を図りながら、拠点の魅力向上に努めていきます。

＜空間の有効利用の例＞

- ①飲食が提供できるように、サービスエリアを設ける。
- ②集客と幅広い世代の参加を促せるように、イベントなどを展開する。
- ③市民による植樹に必要な空間や散策路を設ける。



参考資料

1 これまでの取り組み

本構想の策定にあたってのこれまでの取り組み状況について、ご紹介します。

(1) 平成17年度 産業技術未来博物館構想の基礎調査

産業技術資産を保存・展示し、“モノづくり文化”を発信・継承する施設の実現可能性を検討するために、東海地方を中心とする企業・試験研究機関に対するアンケートや国内外の事例調査などを行いました。

(2) 平成18年度 産業技術未来博物館構想調査

有識者等で構成した「モノづくり文化交流懇談会」から提案・アイデアをいただきながら検討を行い、モノづくり文化交流拠点構想(案)を策定しました。

<モノづくり文化交流懇談会>

【開催日】

第1回 平成18年6月20日(火)、第2回 平成18年8月29日(火)
第3回 平成18年11月1日(水)、第4回 平成19年3月20日(火)

【委員名簿】

- ・赤池 学 : (株)ユニバーサルデザイン総合研究所代表取締役所長
- ・赤崎 まき子 : (株)エイ・ワークス代表取締役
- ・浅井 紀子 : 中京大学経営学部助教授
- ◎奥野 信宏 : 中京大学総合政策学部長
- ・隈 研 吾 : 建築家・慶應義塾大学教授
- ・佐々木 正喜 : 愛知中小企業家同友会会長
- ・辻 信 一 : 経済産業省中部経済産業局産業部長
(吉村 宇一郎 : 同上 平成18年7月の異動により交代)
- ・永田 健 : 国土交通省中部運輸局企画観光部長
(竹田 聡 : 同局企画部振興部長 平成18年7月の異動により交代)
- ・平野 仁司 : 国立科学博物館広報・サービス部長
- ・福田 敏男 : 名古屋大学大学院教授
- ・藤田 菜々子 : 名古屋市立大学大学院経済学研究科講師
- ・牧村 真史 : (株)集客創造研究所所長
- ・マリ・クリスティーヌ : 異文化コミュニケーター・国連ハビタット親善大使
- ・水尾 衣里 : 名城大学人間学部助教授
- ・森田 隆 : 名古屋商工会議所理事・産業振興部長
- 山本 幸司 : 名古屋工業大学大学院教授

※ ◎ : 座長 ○ : 座長代理

(五十音順、敬称略)

(3) 平成19年度 モノづくり文化交流拠点構想の策定

これまでの調査結果を踏まえて詳細検討を行い、モノづくり文化交流拠点構想を策定しました。

<モノづくり文化交流拠点構想検討会議>

【開催日】

第1回 平成19年7月12日(木)、第2回 平成19年11月12日(月)
第3回 平成20年3月24日(月)

【委員名簿】

- ・赤池 学 : (株)ユニバーサルデザイン総合研究所代表取締役所長
- ・赤崎 まき子 : (株)エイ・ワークス代表取締役
- ・荒木 由季子 : 国土交通省総合政策局観光経済課長
- ・荒俣 宏 : 博物学者
- ◎奥野 信宏 : 中京大学総合政策学部長
- ・九鬼 綾子 : ミックインターナショナル(株)代表取締役
- ・隈 研 吾 : 建築家
- ・新海 洋子 : 環境省中部環境パートナーシップオフィス
チーフプロデューサー
- ・竹田 嘉兵衛 : (財)伝統的工芸品産業振興協会理事
- ・平野 仁司 : 国立科学博物館経営管理部長
- ・古見 修一 : (株)SD代表取締役
- ・牧村 真史 : (株)集客創造研究所所長
- ・水尾 衣里 : 名城大学人間学部准教授
- ・山本 栄男 : 愛知中小企業家同友会会長

※ ◎ : 座長

(五十音順、敬称略)

【オブザーバー】

経済産業省中部経済産業局産業部
国土交通省中部地方整備局港湾空港部
国土交通省中部運輸局企画観光部
愛知県産業労働部
愛知県建設部
名古屋商工会議所
名古屋港管理組合

2 モノづくり文化交流講座 開催状況

(1) 平成 19 年度

第 1 回	1 日 時：平成19年8月18日（土） 午後1時30分～午後5時 2 場 所：伏見ライフプラザ 鯉城ホール 3 テーマ：モノづくり文化から「人間・生命・暮らし」を考える 4 プログラムの概要： ◆基調講演 [演題] 名古屋400年のモノづくり文化 作家 荒俣 宏 氏 ◆「モノづくり文化交流拠点構想（案）」の紹介 ◆パネルディスカッション [テーマ] 「歴史を活かす、自然を活かす、人を活かす」モノづくり [パネラー] 赤池 学 氏 科学技術ジャーナリスト 赤崎まき子 氏 (株)エイ・ワークス代表取締役 荒木由季子 氏 国土交通省総合政策局観光経済課長 荒俣 宏 氏 作家 佐々木正喜 氏 愛知中小企業家同友会顧問 [コーディネーター] 飯尾 歩 氏 中日新聞社論説委員 5 参加者数：約300名
第 2 回	1 日 時：平成19年9月15日（土） 午後1時30分～午後4時30分 2 場 所：名古屋港ポートビル・4階講堂 3 テーマ：「街」「港」「モノ」づくり 4 プログラムの概要： ◆基調講演 [演題] 水による街の再生 建築家 隈 研吾 氏 ◆「モノづくり文化交流拠点構想（案）」の紹介 ◆パネルディスカッション及び意見交換 [テーマ] 港の活性化とモノづくり [パネラー] 赤崎まき子 氏 (株)エイ・ワークス代表取締役 隈 研 吾 氏 建築家 牧村 真史 氏 イベントプロデューサー 水尾 衣里 氏 名城大学人間学部准教授 [コーディネーター] 飯尾 歩 氏 中日新聞社論説委員 5 参加者数：約150名

第 3 回	1 日 時：平成20年1月24日（木） 午後1時15分～午後4時
	2 場 所：熱田文化小劇場
	3 テー マ：文化力の時代
	4 プログラムの概要： ◆基調講演 [演題] モノづくりから見た日本文明のありかた 静岡文化芸術大学学長 川勝 平太 氏 ◆「モノづくり文化交流拠点構想（骨子）の紹介 ◆パネルディスカッション [テ ィー マ] 名古屋のモノづくり文化 [パネラー] 飯尾 歩 氏 中日新聞社論説委員 川勝 平太 氏 静岡文化芸術大学学長 竹田嘉兵衛 氏 (財)伝統的工芸品産業振興協会理事 [コーディネーター] 白石 真澄 氏 関西大学政策創造学部教授 名古屋市政策参与
	5 参加者数：約180名

（2）平成20年度

第 4 回	1 日 時：平成20年7月21日（月・祝） 午後1時～午後4時30分
	2 場 所：名古屋国際会議場 224会議室
	3 テー マ：生物多様性とモノづくり
	4 プログラムの概要： ◆基調講演 [演題] 自然の叡智に学ぶ 科学技術ジャーナリスト 赤池 学 氏 ◆特別講演 [演題] 愛知万博からCOP10へ 桐蔭横浜大学特任教授 涌井 史郎 氏 ◆パネルディスカッション [パネラー] 赤池 学 氏 科学技術ジャーナリスト 涌井 史郎 氏 桐蔭横浜大学特任教授 小林 寛司 生物多様性条約第10回締結国会議 誘致委員会事務局長 佐藤 正幸 名古屋市総務局企画部主幹 [コーディネーター] 水尾 衣里 氏 名城大学人間学部准教授
	5 参加者数：約220名

第 5 回	1 日 時：平成20年8月23日（土） 午後1時30分～午後4時 2 場 所：名古屋市女性会館ホール 3 テー マ：モノづくりと生物多様性 4 プログラムの概要： ◆基調講演 [演題] ユニバーサル技能五輪を振り返って プロデューサー 残間里江子 氏 ◆「生物多様性条約第10回締結国会議（COP10）」の紹介 ◆特別講演 [演題] 農・水産廃棄物からモノづくり～発酵はマジックだ～ 東京農業大学教授 小泉 武夫 氏 5 参加者数：約250名
第 6 回	1 日 時：平成20年10月30日（木） 午後1時30分～午後4時 2 場 所：名古屋市公館 3 プログラムの概要： ◆基調講演 [演題] 中部圏の今後 中京大学総合政策学部長 奥野 信宏 氏 ◆公開有識者ヒアリング [テーマ] 世界を視野に [出演者] 荊木 顕治 氏 日米経済協議会事務局次長 奥野 信宏 氏 中京大学総合政策学部長 堀田 治 氏 国土交通省中部地方整備局 港湾空港企画官 夢童由里子 氏 造形作家・アートプロデューサー 佐藤 正幸 名古屋市総務局企画部主幹 4 参加者数：約160名

第 7 回	1 日 時：平成21年1月24日（土）午後1時30分～午後4時20分 2 場 所：名古屋市立大学病院 病棟・中央診療棟3階大ホール 3 テー マ：モノづくり力の持続的発展に向けて 4 プログラムの概要： ◆基調講演 [演題] モノづくりの新時代～メタルカラーの輝き、再び～ ノンフィクション作家 山根 一真 氏 ◆トークセッション [テ ィ マ] 若い力で未来を支える [コメンター] 草野 満代 氏 フリーキャスター 佐藤 正幸 名古屋市総務局企画部主幹 [プレゼンター] 田上 俊一 氏 あいち技能マイスター 中村 友亮 氏 黒紋付染師 成瀬 拓郎 氏 時計師 [コーディネーター] 飯尾 歩 氏 中日新聞社論説委員 5 参加者数：約260名
第 8 回	1 日 時：平成21年3月29日（日）午後2時～午後3時45分 2 場 所：名古屋都市センター11階 大研修室 3 プログラムの概要： ◆基調講演 [演題] 愛知万博から上海万博へ 愛・地球博チーフプロデューサー 2010年上海万博日本館プロデューサー 牧村 真史 氏 ◆報 告 モノづくり文化交流拠点の検討状況 [テーマ] 港の再生に向けて 名古屋市総務局企画部主幹 佐藤 正幸 4 参加者数：約150名

(3) 平成21年度

第9回	1 日 時：平成21年10月25日（日）午後2時～午後3時45分 2 場 所：名古屋都市センター11階 大研修室 3 プログラムの概要： ◆講 演 [演題] JR東海博物館（仮称）について 東海旅客鉄道株式会社 総合企画本部 副本部長 松野 篤二 氏 ◆報 告 モノづくり文化交流拠点構想の検討状況 [テーマ] 港の賑わいづくりについて 名古屋市総務局企画部主幹 西尾 一郎 4 参加者数：約130名
第10回	1 日 時：平成22年1月31日（日）午後1時30分～午後4時 2 場 所：中区役所ホール 3 プログラムの概要： ◆基調講演 [演題] 科学のすばらしさを多くの人に ～モノづくりほど楽しいものはない～ 学研科学創造研究所 所長 湯本 博文 氏 ◆報 告 モノづくり文化交流拠点構想の検討状況 名古屋市総務局企画部主幹 西尾 一郎 ◆パネルディスカッション [テーマ] 次世代に伝えよう モノづくり [パネラー] 赤池 学 氏 科学技術ジャーナリスト 荒俣 宏 氏 作家 栗岡 完爾 氏 名古屋商工会議所副会頭 湯本 博文 氏 学研科学創造研究所所長 [コーディネーター] 飯尾 歩 氏 中日新聞社論説委員 4 参加者数：約300名

3 市民からのアイデア・意見募集

(1)「モノづくり文化交流拠点構想（案）」に対するアイデア・意見募集

平成 18 年度にとりまとめた「モノづくり文化交流拠点構想（案）」に対して、市民からアイデア・意見を募集しました。

- 1 募集期間： 平成 19 年 8 月 1 日（水） ～ 平成 19 年 9 月 18 日（火）
- 2 募集方法： 構想案の概要をまとめたパンフレットを作成し、各区・支所、図書館等に配置するとともに、広報なごや 8 月号、市ホームページ、新聞等による案内のほか、「モノづくり文化交流講座（8 月 18 日、9 月 15 日）」においても募集をしました。
提出の様式は任意とし、郵便、ファックス、電子メール、直接持参より受け付けました。
- 3 提出状況： 提出者数：164 名
アイデア・意見総数：282 件
(アイデア：112 件、意見：170 件)

◆主なアイデア

- ・身近な技術・商品の歴史やストーリーをわかりやすく提示する。
- ・完成品だけでなく、部品や原材料が理解できるような形とする。
- ・「地球温暖化」を止める技術を展開する。
- ・自分が作りたいと思うものが作れる「大工村」「陶芸村」を展開する。
- ・企業の実験場やショールームを誘致する。
- ・技術の継承のため子供たちが体験できる職業体験型施設を作る。
- ・学校で行っている職業体験学習の受け入れ先バンクを作る。
- ・豪華客船を間近で見えるターミナルを整備、商業施設として賑わいを持たせる。
- ・朝市やフリーマーケットが開かれるような活気ある港町を創出する。
- ・若者が情報文化発信するためのステージを形成する。
- ・周りの観光地等と海伝いに未来型モビリティで連携できる場とする。
- ・ホテルを含め「人が住める街づくり」を誘導する。
- ・菓子類等の包装紙、包装機械の歴史を紹介する。
- ・「失敗学」のパビリオンを考える。
- ・「産業の明治村」とする。

- ・職場を退職したOBを活用した場や専門学校を作る。
- ・工業高校と産業のコラボレーションの場とする。
- ・中小企業の「キッザニア」を設ける。
- ・家具をテーマとした国際イベントや音楽イベントなどを開催する。
- ・「モノづくり合宿」やコンテストなどができるといい。
- ・モノづくりリゾートホテルを整備する。

◆主な意見

- ・モノづくり文化や知識を知るきっかけになれば素晴らしい。
- ・最先端のモノづくりを見て、それが体験できることが重要である。
- ・人材育成に関する取り組みを積極的に進めてほしい。
- ・魅力ある集客施設が必要ではないか。
- ・社会見学など学校の行事のことを考慮に入れて整備してほしい。
- ・名古屋の歴史とモノづくりの文化を関連づけたミュージアムにしてほしい。
- ・金城ふ頭を活用してこういう拠点とすることは良いアイデアである。
- ・陳腐化してしまわないような施設、エリアになるように工夫してほしい。
- ・子供たちが「モノづくり」に関心を持ち将来の人材になるような構想にしてほしい。
- ・産業遺産のリストアップとPRが図ればいい。
- ・水と緑あふれる豊かな楽しい公園にしてほしい。
- ・あおなみ線の活用など市中心部からの交通アクセスの配慮が必要である。
- ・中部国際空港との連携を考えてもらいたい。
- ・展開場所は名古屋港でなくてもいいのではないか。
- ・具体性に欠け、イメージが湧かない。
- ・税金の無駄遣いになるのではないか。
- ・施設を作るのではなく、技術を直接支援して後継者育成につなげることが重要ではないか。

(2)「モノづくり文化交流拠点構想（骨子）」に対する意見募集

「モノづくり文化交流拠点構想（骨子）」に対して、市民から意見募集（パブリックコメント）を行いました。

- 1 募集期間： 平成 19 年 12 月 18 日（火） ～ 平成 20 年 1 月 31 日（木）
- 2 募集方法： 構想（骨子）の概要をまとめたパンフレットを作成し、各区・支所、図書館等に配置するとともに、広報なごや 1 月号、市ホームページ、新聞等による案内のほか、「モノづくり文化交流講座（1 月 24 日）」においても募集をしました。
提出の様式は任意とし、郵便、ファックス、電子メール、直接持参より受け付けました。
- 3 提出状況： 提出者数： 91 名
意見数： 206 件

◆主な意見

① 構想の考え方について

- ・ 構想の実現は並大抵ではないと思うが、市民に夢を与えるこの構想の実現に邁進してほしい。
- ・ 市民や子どもたちが、楽しく学び、夢や希望が持て、何度も足を運んでくれる施設をつくるためにも、市民や各種団体の叡智とパワーを大いに発揮できるシステムをつくってほしい。
- ・ 施設はできるだけ民間の力に委ねた方が魅力あるものができるのではないか。民間の目玉施設が複数立ち並ぶと、あの愛・地球博を髣髴させ、税金の支出も抑えられて一石二鳥である。
- ・ 民間事業者の協力やコスト削減に努めるなど、多額の税金の支出を抑えること。

② 展開の方向性について

- ・ モノづくりに初めて触れる人、専門家を目指す人、この地域への立地を考えている企業など、異なるニーズに合わせて、施策を分け示していく必要がある。
- ・ 伝統的なモノづくりと創作的なモノづくりを郷土の発展にどう活かしていくか関心がある。
- ・ この拠点は、「愛・地球博」における企業館や外国館などハコものを中心にした長久手会場と、人や自然を中心としたソフト中心の瀬戸会場の両会場の魅力的な部分を、バランスよく詰め込んだエリアにすることが望ましいと思う。
- ・ ガーデンふ頭と金城ふ頭を船で結び、共通イベントを開催するなど、金城ふ頭だけでまとめるのではなく、他の拠点との共通項を考えてほしい。

- ・中・大企業を優先するのではなく、地域における小企業、地場産業、NPOなどの取組みを支援していくとともに、現地での生の学習ができる機会を設けたり、各区にサテライト的な事業を展開するなど、金城ふ頭のための事業ではなく、地域社会が元気になる企画にしてほしい。

③ 展開の事例について

- ・一般受けするモノづくり文化ではなく、歴史を踏まえた近代のモノづくり文化の世界を作り上げ、集大成された愛知の文化を見せてほしい。
- ・企業の業績を正確に評価解釈したものや、公害を乗り越えてきた知恵、兵器についての展示や科学技術の説明など、企業博物館では説明しにくい部分の展開が必要だと思う。
- ・最新技術を体験できるように、何年かを変えていくのが良いと思う。
- ・企業などが社会実験をできるスペースとして、活かせればと思う。
- ・これからモノづくりを担う若い世代のためにも、「子供モノづくり職業体験場」を充実させることが非常に重要だと思う。
- ・退職後の高齢者が自分たちの経験を活かし、収益は多くなくても働いて社会貢献にたずさわる必要があるとあり、そうした貢献できる場を提供してほしい。
- ・海辺という立地を十分に活かし、大型客船が岸壁に接岸できるように整備すれば、この構想はいっそう映える。
- ・海岸のオープンモールに洒落た有名レストランを誘致し、夜間に若者が訪れるよう工夫する。
- ・季節の変化を上手く取り込んで四季折々に訪ねたくなるような、「水と緑」の空間を作してほしい。
- ・殺風景な金城ふ頭が、緑にみちあふれ、その中に展示施設が点在することになれば、行ってみようという気が起こる。
- ・産業観光巡回のコース内にモノづくり拠点めぐりも取り入れたらどうか。

④ その他

- ・民間や国を巻き込みながら進め、シンポジウムの開催や広報なごやで紹介するなど、市民への浸透を図ろうとする熱意に好意を感じる。
- ・名古屋のモノづくりは世界に誇れる大切なものであると思うが、事業費とその財源、運営方法などを示して意見を聞くべきではないか。
- ・平成23年から段階的に整備するのではとりまく環境が変わってしまい遅すぎる。
- ・将来の財源負担を考えると大規模なものをつくる必要はなく、もっと都心に近く、規模を小さくし、イベントや展示物などを頻繁に入れ替え、何度も行きたくなるような魅力のある交流拠点をつくってほしい。



企画・編集
名古屋市総務局

〒460-8508 名古屋市中区三の丸三丁目1番1号
TEL(052)972-2232 FAX(052)972-4112
E-mail monozukuri@somu.city.nagoya.lg.jp
URL <http://www.city.nagoya.jp/shisei/sougou/mono/>

発行年月
平成22年6月